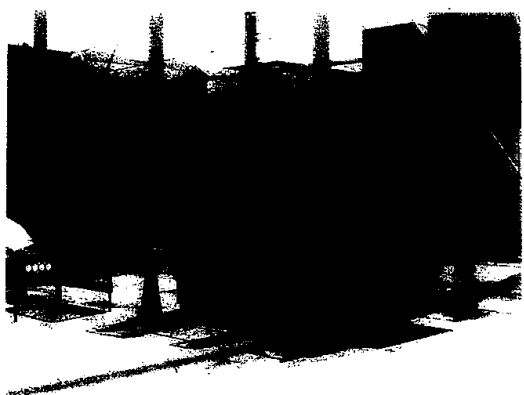


ロジバルエクस्प्रेसがトラック、フォークリフトの安全対策を強化

居眠り運転警告装置を試験導入し、「SRフォークリフト」も検討中

バンダイロジバルの子会社のロジバルエクस्प्रेस（本社・東京都葛飾区、馬場範夫社長）では、最新のツールを活用し、トラック、フォークリフトの安全対策を強化する。長距離運行

などのトラックにJUKIの居眠り運転警告装置「スリープバスター」を試験導入。セイフティレコーダをフォークリフトに応用したデータ・テックの「SRフォークリフト」の本格採



用も検討中だ。今年度から、ドライバーコンテストに加え、フォークコンテストもスタートしており、安全対策の充実を図っている。



トラックの「SRフォークリフト」(リフト)のデモ機を川崎営業所の3

高速ツアーバスの事故を受け、安全対策の再徹底を図っているもので、6月16日には実務者を集めて研修会を開催。同事故の運行管理上の問題点のうち16項目について、自社に照らして再チェックするとともに、各営業所の運行管理者とドライバーによる点呼のデモンストレーションも実施した。また、居眠り警告装置「スリープバスター」を試験的に導入することとし、同装置の説明も行った。

「スリープバスター」は、背もたれ部に内蔵した圧力センサーにより、眠気が生じる約10分前に「喝ッ」の警告音と赤いシグナル画面で警告し、体調の変化を常時モニタリングするシステム。無理なく運転できている「省エネモード」、心身に負担がかかっている「消費モード」、運転に支障が出る可能性がある「喝モード」を把握できる。記録データを基に、従業員の健康管理、安全運行管理に役立てる。

ロジバルエクस्प्रेसでは、川崎営業所（川崎市川崎区）で2両に試験的に導入。2日運行以上または長距離運行、早朝や深夜運行車両など装着優先車両を絞るとともに、モードの変化の度合いに応じてドライバーが行うべき対処をマニュアルにまとめた。今後、ドライバーに使用感をヒアリングし、社内運用ルールを策定し、全国の各事業所に1〜2両、合計15両程度に水平展開していく構想だ。

また、フォークの事故削減に向け、データ・

映像記録に基づく解析レポートにより、荷物の落下につながりかねない挙動、注意挙動や超過操作などを運転診断結果として数値化する。運転のクセや時速10km/h以下の走行、一方通行などルールが守られているかをチェックできるため、本格導入を検討している。

ロジバルエクस्प्रेसでは2009年から、トラックにセイフティレコーダを導入。運転操作が数値化されることでプロドライバーとしての意識付けにつながり、事故削減に大きな効果を発揮した。今回、トラック用のセイフティレコーダをビデオタイプに切り替えるのに伴い、既存のセイフティレコーダを営業車に取り付け、営業車も含めた安全対策を強化している。

6月11日には、3回目となるドライバーコンテストを開催し、事業所選抜の8人が学科試験のほか、実技、整備点検でナンバーワンドライバーを競い合った。5月18日には同社初のフォークコンテストもスタート。今回はフォーク責任者を集め、学科、実技、点検に15人が挑戦した。いずれも、社内で開催予告をポスター掲示し、全社的なイベントと位置付けており、今後も、キャンペーンの企画など事故撲滅に向けた取り組みを充実させていく。

柴田昇常務は「スリープバスターについては、インターネット等により管理者にリアルタイムに情報を飛ばすことができないかと要望している。デジタル無線を全社的に導入しているため、ドライバーに『呼び掛け』ができるようになるれば、一層安全対策を強化できる。SRフォークリフトは、映像記録をマネジメントに役立てられるのではないかと話している。